

エンディングノート

映画「エンディングノート」上映会 & 講演会

報告

コムフェスティバルアフターイベントとして毎年実施している「シネマ&トーク」。

今年は、映画「エンディングノート」(2011年/日本)の上映とともに、国立病院機構 東京医療センター 内科医長 大中俊宏さんをお迎えして講演会を開催しました。

のべ800人もの方にご来場いただき本当にありがとうございました。皆様からいただいたアンケートからご意見・ご感想の一部を紹介させていただきます。

映画「エンディングノート」をご覧になっていかがでしたか？



- ・死について真剣に考えることができた。(10代男性)
- ・家族の大切さを感じた。(40代男性)
- ・家族を連れ一緒に観るべきだったと思う。私も是非参考にしたい。(50代男性)
- ・早速、エンディングノートの作成にとりかかりたい。真実が訴える圧倒的な迫力に涙ることができた。(60代以上男性)



- ・最後までユーモアを忘れなかった主人公やその家族を見て、笑顔の尊さを教わった気がする(20代女性)
- ・涙がとめどなく流れた。いつか必ず迎える自分の死、自分の愛する家族の死について悔いのないように生きていきたい。(30代女性)
- ・最期に「ありがとう」と「幸せだった」と言える人生がおくりたいと思った。(40代女性)
- ・実在の家族のドキュメントだから迫ってくるものがあり、自然で良かった。(60代以上女性)



演題「あなたは限りある人生をどう生きていますか？」
～そしてあなたの大切な人の限りある人生をどう支えていますか？～

講演会より

愛する人を支えるときのコツ

がん患者の家族は本人以上に心身ともに疲れて、先に倒れてしまうということがよくあります。

支える側は心にも体にも負担がかかるので、自分の時間を作り、他に支えてくれる人を見つけることも大切です。ときには泣き、ときには笑うなど感情もどんどん表に出していいのです。

講師



国立病院機構 東京医療センター
内科医長 大中 俊宏 さん

人生の締めくくりに向けて

使える時間がだんだん限られてくると、人生を締めくくる作業というものが現実のものとなってきます。「さようなら」「ありがとう」「愛しています」「ごめんなさい」。こういう言葉はぜひ大事な人に伝えてください。

また「自分がこういう状態になったときに医療的な処置は必要ないからね」「家族で仲良く過ごしてね」など、普段の会話の中で自分の意向を家族に伝えておくことは、わがままではなく、むしろ家族への愛情だと思います。

家族で共有する最期

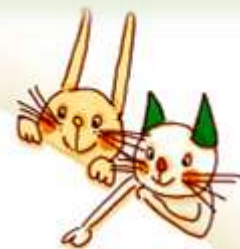
本人がどういう最期を迎えたいかがわかっていると、家族もいろいろできることがまたあるんですね。



本人、家族みんなが同じ情報をお互いに共有しておくこと、そして同じ方向を目指し支えあっていくことが大切だと思います。



講演会の感想

- ・正岡子規の例がわかりやすかった。(40代男性)
- ・生きるヒントにしたい。(50代男性)
- ・支える側、支えられる側の対処の仕方が参考になった。(60代以上男性)



- 
- 
- ・実母が昨年がんを告知され、家族中パニックになってしまったので、普段から話ができたらあんなにパニックにはならないだろうと思った。(30代女性)
 - ・大中先生のような方がこれからの医療に携わってくださることがありがたいと思い、私たちの支えになっていただけると思うと心強い。(40代女性)
 - ・自分の大切なことを家族に伝えるためにも、自分を見つめ直すことが必要だということを改めて感じた。(50代女性)
 - ・東日本大震災の現地に行き感じたことをお聞きし、今を生きることを感じさせられた。(60代以上女性)
 - ・限られた命を有意義に生きる大切さを再認識させられた。(60代以上女性)

